

経済学が 取り扱うもの

科目・学問の不明瞭な輪郭

みなさんがいま学校で勉強している科目とはそれぞれどのようなものでしょうか？みなさんが大好きな(?) 社会科を例に考えてみましょう。大きく分けて地理・歴史・公民の3つの領域を取り扱う社会科を一度に一言で説明するのはなかなか難しそうです。一応、文科省によれば、社会科は公民的資質を養うことを目的とした科目らしいのですが、専門家以外にはあまりピンときません。小学校から長年学び続けている社会科ですら、それが何であるかを説明することは簡単ではありません。かといって、漢文を読み下したり楽器を演奏したりすることが、社会科だという人はそれほど多くないでしょう。このように、な



笠井 高人

【研究テーマ】

経済学の歴史

tkasai@mail.doshisha.ac.jp



んとなく皆が社会科とは「このような分野だ」という考えを持ってますし、逆に「これはちょっと違う」というものもあって、尚且つそれを他の人と共有できているのです。このような状態は高校までの学校で勉強する科目だけでなく、大学で学ぶ様々な学問にも当てはまります。ある学問を「このようなものだ」と定義するのは簡単ではないですし、隣の学問との境界線をきれいに引くことも難しく、実際には点線がうっすら引ける程度であったり、隣の学問と重なる部分が多分にあったりします。

経済学という言葉

経済学はどんな学問なのかをわかりやすく紹介することが目的の本書で問うのもいささか妙ですが、経済学とはどんな学問でしょうか？ 20世紀にライオネル・ロビンズが「稀少性の科学である」と説明しました。けれども、近年着目される行動経済学という心理学の手法を用いて人間の行動を分析する領域などは、その定義に収まりきりません。

そもそも経済学の対象であるエコノミー (economy) はオイコノミカ (oeconomica) に由来します。この言葉は、ギリシャ語で家を意味するオイコス (oikos) と秩序を意味するノモス (nomos) をもとにして作られ、元来お金や人 (や奴隷)、家畜を使って家庭をうまくやりくりするという意味の家政を表していました。それがいつしか国家の管理運営を意味するようになり、さらには私たちが知っている市場をもとにした経済のイメージに移ってきます。



経済学の父と呼ばれるアダム・スミスは、経済学を示す言葉としてポリティカル・エコノミー (political economy) という表現を用いました。無理に直訳すれば政治経済学となりますが、通常、経済学と訳されます。ただ、ポリティカル・エコノミーという表現を用いたのは何もスミスが最初ではありません。ということは、スミス以前にポリティカル・エコノミーという言葉を用いつつも、経済学者としてみなされなかった人がいることになります。しかもスミスは、『国富論』のほかに『道徳感情論』という本も著した論理学や自然哲学の先生でした。では、なぜスミスが経済学の父なのでしょう。

一方で、経済を分析する学問 (経済学) を意味する英語として私たちがしばしば使用するエコノミクス (economics) という言葉は、19世紀末にアルフレッド・マーシャルという人物によって広められました。この時すでに皆さんが中学校で習うような需要曲線と供給曲線のアノ図が用いられていましたので、私たちがイメージする経済学にかなり近いでしょう。

経済学って何でしょう

上記の話に基づけば、エコノミーはそもそも家庭のやりくりを意味していたが、それを分析する経済学とはもともとポリティカル・エコノミーであり、一方で私たちがイメージするのはエコノミクスなので…。こんなことを考え始めると経済学とは一体何なのかよくわからないまま日が暮れるどころか、夜が更けて、空が白んできそうです。

このように経済学はどんな領域なのかあまりはっきりしません。だからこそ経済学とは何なのかを考える際には、どんなことを対象とし、またそれがどんな変化を経てきたのかを（徹夜しながら？）考える必要があります。

つきつめて考えれば、経済とは働いて何かを生産したり、購入したり、お金の貸し借りをしたりといった人間の日々の営みを指す言葉なので、特定の領域を経済学の考察対象から排除することはおよそできません。お腹がすいたときにコンビニでパンを買うことは家政にほかならないでしょうし、貧困や格差、金融なども経済学の主たるテーマです。

さきほど見たように、これまで経済学は考察対象を大きく広げてきましたが、その傾向はこれからも続くでしょう。ただし、その方向は誰にもわかりません。経済学を学び、経済学はどんなものなのか、そして経済学の未来について一緒に考えてみませんか。御所の前でお待ちしています。